

●特別記念賞〔論文概要紹介〕

ICTを使って情報 モラル教育振興の気運と 実践共有の波を創る ～正しく使える子どもの

育成を願って～

埼玉県越谷市教育センター おおにしひさお 大西久雄

【実践の概要】

子どもたちのスマホやネット利用によるトラブルが社会問題化している。親をはじめ学校関係者及び社会関係団体等の危機意識の高揚や課題解決の具体的実践には、未だばらつきと戸惑いがある。そこには、情報モラルやリテラシーを指導することの垣根の高さと自信のなさが根底にあるように思えてならない。

そこで、ICTを活用してわかりやすく気軽に誰もが利用でき、自由に使える情報モラル教育啓発資料を作成、提供し、その実践活動の様子や成果を共有できる機会を創出した。この趣旨に賛同する各種組織・団体やグループ等がつながるコンソーシアムを構築し、その力により実践活動の輪が少しずつ全国に拡大してきている。ICTを有効活用し、デジタルとアナログで様々な人々が関わる新たな情報モラル教育啓発実践のモデルを構築しているところである。

【論文内容の紹介】

1 取組の経緯

情報化の進展に伴い子どもたちを取り巻く環境は激変し、スマホやネットの諸問題が顕在化している。それに伴い文科省をはじめ、各処でその対策、取組を行っている。

しかし、それらは資料や教材を作成配付し、最終的には各学校、各家庭でそれぞれ指導して

いきましようという形態を取らざるを得ない。ともすると熱心な者に頼り、その成果の共有する場も少なく、場合によっては形式的な指導になりがちなのが、現在の情報モラル、リテラシー教育の現状と言えるかもしれない。この状況にICTを有効活用して新たな視点で何かしらの一石を投じられないか、という想いの発露が本取組の起因である。

2 ICTで起こる課題にICTで向き合う

(1) 誰もが共有できる親しみの持てる資料

既存の配付資料はとかく似かよひ、難しいという声を聞く。では、マンガなら親しみが持てるだろうという発想の下、特技を活かして情報モラル啓発指導マンガ「ネット警備隊ねっばとくん」を作成、フェイスブック上で公開し、自由に利用できることを告知した。

(2) 想いをつなげるコンソーシアム

フェイスブックへの掲載を機に、県内はもとより県内外の教員、PTA等が関心を示し、活用する事例や講演の依頼等の具体的な動きや、その成果が見えるようになってきた。各教育委員会、PTA連合会等のサイトにも転載、配付などの要請も増えた。そこで、活用と成果の共有を目的としたみんながつながるコンソーシアム「ねっばとくん100万人プロジェクト：いっちょくトーク・コンソーシアム」をネット上で提唱した。そのつながりの輪が広がりを見せている。

(3) つながりを共有するポータルサイト

企業、大学、PTA等諸団体の協力を得て、情報や成果を共有できるポータルサイトを構築(<http://neppato-kun.c2013oh.net>)、現在の活動状況や成果の共有を図っている。ICTを活用したデジタル啓発のみならず、共通資料を活用した講演・講話などのリアルなアナログ啓発も併せて拡大している。

3 成果と今後の展望

ネット上で公開した自作の情報モラル啓発マ

ンガが、ICTと人の力を借りて、デジタルとアナログによる啓発意識の高揚、実践機会の触発をし始めている。様々な対象や組織が有機的につながるプロジェクトに育てたい。

●特別記念賞【論文概要紹介】

「学校の宝」を活用した復興教育の推進

～全校表現劇「海よ光れ」の
取組を通じた震災からの
教育復興を目指して～

岩手県山田町立大沢小学校 佐久間 充

【実践の概要】

東日本大震災の被災校である本校では、地域の教育素材と教育機能の活用による教育力の再生をねらいつつ、子どもたちに「未来の地域社会を創造する逞しい意欲」を培い育てることを目的として「学校の宝」である全校表現劇「海よ光れ」とそれに関連する探究学習・体験活動等の諸取組を柱に教育の復興を目指した営みを推し進めている。

学校と保護者、地域住民が同じ価値観を持ち、子どもたちの日常的な学習への具体参画と体験活動や交流活動を通じたコミュニケーションを基軸とした種々の「学び」の中で、子どもたちは、郷土の文化や歴史や自然（海）の厳しさや恵みを理解し、人々の苦労や願い、生き様や在り様を真剣に考えるようになった。そして、最終的な発信の機会としてのステージで、その集積された確かで強い「思い」を素直な感性と体で精一杯生き生きと表現する。

未だ、心に大きなダメージを持つ子どもたちではあるが、自分たちの力で地域とともに日々、

復興に向けて逞しく成長している。

【論文内容の紹介】

1 実践の視点

(1) 復興教育の推進

- ① 本校における復興教育推進の理念の共有・共通理解と方針の決定及び実践展開
- ② 未来の地域社会を創造する子どもたちの逞しい意欲と力の育成〔ひとづくり〕
- ③ 家庭・地域との連携・協働による教育土壌の復旧・再生と開拓

(2) 復興教育の「柱」としての全校表現劇「海よ光れ」の展開実施

- ① 取組に対する新しい意義付け
- ② 復興教育推進のための全体計画及び指導計画の策定・作成と日常実践の推進
- ③ 地域の教育機能・教育素材の有効活用のための具体方策の検討

2 取組の実践

(1) 地域理解、地域の人々の思いの理解のための探究活動・体験学習の実施

- ① 総合的な学習の時間のテーマ学習「伝えよう！わたしたちの『海よ光れ』」
- ② 体験学習・体験活動の実施
ア 「スルメ割」等の水産作業体験
イ 取組を通じた地域住民との交流

(2) 劇づくりの活動とその具体過程における子どもたちそれぞれの思いの昇華

(3) 「大人が汗をかく仕組み」づくり

(4) 全校表現劇「海よ光れ」の創作と上演

3 取組の成果と課題

(1) 成果

- ① 復興教育で身に付けるべき力の育成

- | | |
|---|-------------------|
| ア | 判断力・思考力・行動力 |
| イ | 何事にも一生懸命取り組む姿勢・態度 |
| ウ | 仲間を思いやる心 |

エ 地域の波長や匂い、人々の思いを感じ
取る優しい素直で細やかな感性・感受性

取組前提で掲げた上記の資質・態度等の育成が様々な場面で感じ取れること。

② 基本的な生活習慣の確立

保護者・地域住民の主体的な活動参画により、子どもたちの生活上の諸課題についての理解が進み、改善に向けた具体的な営みが行われるようになったこと。

③ 学校づくりと地域文化の創造の一体化

学校・家庭・地域の意識共有と連携・協働による教育機能の活性化と活動の場づくりが進み、地域コミュニティの再生のための契機となってきたこと。

(2) 課題

① 地域の教育機能の一層の活用と連携

② 継続的な子どもたちの「心のケア」

●奨励賞〔論文概要紹介〕

筆者の意図を評価読み する高学年説明的な文 章の学習

～比較活動を位置付けた

単元構成を通して～

福岡教育大学附属福岡小学校 たけもと まなぶ 竹本 学

【実践の概要】

本研究は、高学年の国語科学習において、筆者の意図を評価読みする子どもを育てるために、比較活動を位置付けた単元構成を手だてとして行った内容である。説明的な文章を読み、筆者の意図を読み取るだけでなく、「なぜこのような内容や述べ方なのか」のように読みの課題を

もち解決していくことが大切であると考えた。なぜなら、情報化社会において、その情報を鵜呑みにせず、正しく判断していく力が必要だからである。

説明的な文章において、主教材と副教材（同じ筆者かつ、同じ主張であり、内容、構成、写真などに違いがある）とを意図的・計画的に比較、交流、意見文を書くという活動を仕組むことで、子どもたちが「なるほど、筆者はこのような意味で書いたのだ」のように、筆者の意図を評価することができた。

【論文内容の紹介】

1 はじめに

主教材は、「動物の体と気候」（東京書籍平成23年度版）であり、副教材として取り扱う「動物の体」（東京書籍平成17年度版）の改訂版である。筆者はともに「増井光子さん」であり、主張も同じである。二つの教材には、次の四つの違いがある。これらの違いに着眼させ、なぜ増井さんは今の教科書（主教材である「動物の体と気候」）のように変えたのか、そして、自分だったらどのように書くかについて、二つの教材を比較しながら考えさせていった。

題名	動物の体と気候	動物の体
シカ	・エゾシカ(北海道) ・ホンシュウシカ(本州) ・キュウシュウシカ(四国、九州) ・ヤクシカ(屋久島)	・エゾシカ(北海道) ・ホンシュウシカ(本州) ・ヤクシカ(屋久島) ・ケラマジカ(沖縄)
写真 など	・シカの写真が横 に並んでいる。 ・シカの体長を表 すグラフがある。	・シカの写真が縦 に並んでいる。 ・シカの体長を表 すグラフがない。
ラクダ	・書かれていない	・2ページにわたっ て書かれている。
構成	・全ての事例で寒 いとあたたかいの 対比になっている。	・ラクダの事例は 対比になってい ない。

2 比較活動

比較活動は、主教材の読み取り、副教材の読みと、「なぜ主教材のように変えたのか」「自分ならどうするか」を考えるという順序で行った。以下は子どもの考えである。

(シカの比較)

一番大きい本州を分けた方がシカがそれぞれの地方に広がっていることが分かるからだろうと思う。ほくなら、今の教科書に、沖縄のケラマジカも入れると思う。全国にシカが体の大きさを変えてすんでいることが、さらに分かるからだ。

(写真やグラフの比較)

写真だけなら、アップカールズが分からない。写真を横に並べて、グラフをのせると、シカがどのように体の大きさを変えているかよく分かる。しかも、人間と比べられるグラフになっているからさらによい。

(ラクダや構成の比較)

増井さんは、ラクダの事例をなくしたのは、寒いとあたたかいという対比を大切にしたらからだ。ラクダは体をさばくの気候に合わせているけど、寒い地方にすむ動物を入れる方が説得力が増すからだ。寒い地方にすむ動物の事例も入れるとさらに説得力を増すのではないかと思う。

3 おわりに

筆者の意図を評価読みするためには、原典や前の教材などと比較することが大切である。今後は、文学的な文章における評価読みの在り方を研究していきたい。

●奨励賞【論文概要紹介】

自己を理解し自己肯定感を高める生活科の伝え合い交流する活動

広島県東広島市立河内小学校 はぎおか ますみ 萩岡真澄

【実践の概要】

本実践は、小学校第2学年の児童が自己を理解し、自己肯定感を高め、「がんばれば何でもできそうだ」と将来への希望をもつことができるようにするための実践である。生活科は「かわり」を大切にしている。ものとかかわり、人とかかわり、児童は自己を理解していく。意欲をもって活動に取り組むことで、ものとかかわりは自然と生まれる。そこで、人とかかわりをより充実させるべく、活動中に生まれた気付きを、友達と「伝え合い交流する活動」を通して自己を理解し自己肯定感を高める取組を行った。

【論文内容の紹介】

第2学年で、特に伝え合い交流する活動を充実させることに重点をおいて授業を行った。単元を通して児童は、いろいろなことができた自分を自覚し、がんばったことを周りに認めてもらう喜びを味わうことで今後の生活への意欲へとつながることを期待し実践を行った。

1 伝え合い交流する活動の工夫

① イメージマップの活用

- 文章表現が苦手な低学年の児童が、活動の気付き、振り返りや思いを、簡単に短い言葉で表現した。

② 振り返りシールの活用

・「できるようになったシール」「がんばったシール」「友達のおかげシール」の3種類のシールを用いて、振り返りの視点を明確にした。

2 実践内容

① おもちゃ作り単元

交流により「友達が助けてくれると意外とできる自分」や「がんばってできた自分」に気づき、それらがつながって「できなかったことができるようになった自分」に気付いた。交流後は、「何回も失敗したけど、できてうれしかった」こと、「友達は自分が思っていないことを教えてくれるから一緒にすると楽しくできる」ことなどを振り返った。ある児童は最後に「自分なんでもできる。がんばる」とこれからの生活に意欲をもって活動を終えた。

② かげとあそぼう

おもちゃという友達とのパイプとなるものがないなかでも、友達とかかわり、交流をさせるための取組である。シールでの振り返りが定着してから、自分自身に視点を当てて振り返りを行う習慣が身に付いた。

③ 学校の木 紹介プロジェクト

小学校にある木を、全校児童や木の先生、木の札を仕上げてくださった地域の方々、参観に来てくれた家族に向けて紹介する、一大プロジェクトである。発表後は、「私たちでもできた」「知らなかったと言われてうれしかった」と満足感があふれていた。子どもたちの中に、満足感、達成感、有能感など様々な思いが生まれた瞬間だった。

④ 明日へジャンプ

これまでの自分を振り返り、まさに自分自身に気付く単元である。

最初のおもちゃ作りで友達とのかかわりがもてず支援が必要だった児童が学級の一人一人に向けて、「○○くんとは○○をした。○○してくれた」とかかわったことをみんなに伝える作

文を書いた。そして最後に「みんな、ありがとう」と結んでいる。一緒にやって楽しかったこと、一緒にやったから成功してうれしかったことなど、友達への思いを伝えることができた。

3 研究のまとめ

「どんな3年生になりたいかな？」と考えたとき、ある児童は、『もうあきらめる、もう自分はできない』と思わずに、友達や家族に教えてもらいながら一生懸命やる」と書いている。伝え合い交流する活動に重点をおいて取り組んだ1年間のまとめとして、3年生に向けての抱負をもつことができたこの児童たちは、この先、どんなことがあっても意欲的に取り組み、友達とともに協力して乗り越えていけるであろうと確信した。伝え合い交流する活動の意義はここにあると言えるだろう。

●奨励賞〔論文概要紹介〕

子どもが変わるNIE

～「思考力」「判断力」「表現力」の育成を目指して～

福井県大野市立有終南小学校 ふるかわのりこ 古川典子

【実践の概要】

大野市立上庄小学校では、新聞を読んで感じたことや考えたことを交流することで「思考力」や「判断力」を育み、新聞を読んで考えたことを発信したり、学習したことを新聞形式で発信したりして「表現力」を高めたいと考え、2010年度よりNIEの実践を始めた。こうした考えのもと、サブテーマを『「思考力」』『「判断力」』『表

現力』の育成を目指して」とし、全教員が協力して全教育課程での新聞の有効活用を試みた。新聞の特性を生かして様々な実践を積み重ね、サブテーマに迫る児童の変容を図ってきた。

【論文内容の紹介】

1 研究の仮説

学びの中に新聞を取り入れることで、学習内容が実社会とつながり、学びに広がりや深まりが生まれる。その中で、「社会への興味・関心」を高め、「思考力」「判断力」「表現力」が育まれる。

2 実践内容

ステップ1 見通しをもつためのNIE学習計画の作成

- ①教師によるNIE年間計画表の作成
つきたい力や発達段階を考慮し、各学年の学習内容と関連付けてNIE計画表を作成した。
- ②児童によるNIE学習計画表の作成

学年ごとに1年間の学習活動を見通して、児童とともにNIE学習計画表を作成した。



ステップ2 新聞に親しみむための取り組み

- ①新聞と親しむ活動
「新聞の見出し付け」「『の』の字あつめ」「カタカナあつめ」「新聞で変身」「みてみて新聞コーナー」の設置等を行ってきた。
- ②新聞閲覧コーナーの設置



図工「新聞王国を作ろう」



- ③学級での新聞スピーチ
- ④お昼の放送での新聞ニュース
- ⑤ファミリーフォーカス

毎月1回、全学年が家族と新聞記事を読んで、それについて感想を交流し合った。

ステップ3 「社会への興味・関心」を高め、「思考力」「判断力」「表現力」を育む新聞活用

- ①授業での活用
- ②スクラップ新聞コンテスト
- ③新聞スピーチコンテスト
- ④新聞読書
- ⑤新聞への投稿



スクラップ新聞コンテスト

3 成果と課題

新聞は小学生にとって難しいという問題を抱えながらも、それぞれの発達段階を考慮して指導法や活用方法を工夫することで、全児童に有効な取組ができた。

学力調査結果では、国語の活用力問題の正答率が高い結果となった。中でも新聞記事を引用し、相手や目的に応じて効果的に提案する文章を書く問題が特に良い結果だった。これらの結果は、本年度の児童に限って言える値かもしれないが、NIE活動を通して培われていった結果とも考えられる。また、NIEに取り組む前と比較すると、人前で自分の意見を話すことが苦手だった児童が、様々なNIEの機会を得て多くの人の前で堂々と自分の考えを話せるようになってきた。

新聞を活用した教材開発や授業研究は、教師のスキルアップにつながったものの大変な労力と時間を費やした。今後も互いに情報を共有し合い、協力体制を組むことが大切だ。また、小学校のNIE活用には保護者の理解や協力も不可欠だ。今後も新聞を活用した取組について学校便りなどを通して理解を深めて、家庭も巻き込んでNIE活動を進めていきたい。

●奨励賞〔論文概要紹介〕

未来の社会を築く 子どもを育てる キャリア教育の推進

山口県下関市立王喜小学校 やまねもとひで
山根基秀

【実践の概要】

現在のグローバル化が進む国際社会では、常に新しい知識・情報・技術を更新する必要がある。現状を生きる子どもたちは、夢や希望を持ち、将来にわたり学び続け、力強く生き抜く力が必要となる。そこで、キャリア教育の視点に立った教育課程を編成し教育活動を展開することで、持続可能な社会にかかわる実践力が育成されるのではないかと考えた。

夢の実現には学力と生活を保障する教育が必要であると考え、学力向上については各教科での実践を通して行い、生活面では「心の成長」を願い、学習規律や生活習慣の確立をめざし、道徳や特別活動等の実践を行った。

【論文内容の紹介】

1 キャリア教育を柱とした教育課程の編成

① 子どもの意識調査

将来の夢の選択理由や実現予想から、「絶対になりたいし、なり方もわかる」を理想型とした場合、学力も高く自主性や公平公正さに富み、その逆の要指導型は利己的で、全体に、人間関係を重視するポイントは低かった。

② 年間指導計画への位置付け

「自分がしたいこと」「自分ができること」「社会が求めていること」の視点を発達段階に応じ教科等に位置付け年間指導計画を作成した。

2 教科による実践

① 「自分がしたいこと」「自分ができること」「社会が求めていること」の実際

農業体験や地域学習、「2分の1成人式」などで自分がしたいことを見出す、そして安全な町づくりの提案や本を題材にテーマ別に意見文を書き、自分ができのことを考えた。更に、職業体験で受け入れた先輩から話を聴く、新聞を活用して社会情勢を把握するなどして社会が求めていることに気付いていった。

② 国語科や算数科の実際

確かな学力を養うために指導方法の工夫改善としてノート指導と板書の充実を図った。また、学年ごとに学習と生活の到達度を設定し、毎学期ごとに基礎学力の定着を図る成長診断テストを実施し、合格証を配布した。

③ 社会科の実際

4年「健康なくらしをささえる」では、ごみを生き返させる方法を考える、「私たちの県のようす」では、ご当地キャラクターに込められた願いを考える、6年「世界の中の日本」では、SWOT分析から日本のリーダーになろうという課題を考え、主体的によりよい未来を築いていこうとする姿を求めていった。

3 道徳による実践

「自分の命は自分で守ろう」をテーマに、公助や共助、自助がかかわりあって安全な社会を築く学習を行った。また、地元詩人の金子みすゞの詩を活用し、他者を思いやる心を育む授業も仕組み、心の教育の推進を図った。

4 その他の教育活動による実践

心の成長の基盤づくりとして腰骨を立てる立腰教育の実践、学習の約束やチャレンジ目標の設定を行い、学習規律の徹底を行った。あわせて、家庭では自主勉強ノートの活用や生活リズムチェックの調査を行い、地域と連携して、挨拶の励行なども行った。

【成果と課題】

学力と生活を保障するキャリア教育を実践した結果、自立の基礎が養われ、自分と他者、自分の生活と社会、現状と未来社会とのかかわりを考え、よりよい未来社会を築いていこうとする力強い意志を感じることができた。

今後、未来社会に対応できるiPS細胞のような教育課程を常に模索し、知識基盤社会を生き抜く確かな学力の醸成をめざしたい。